

フェドシューク
『古典作家の難解なところ
あるいは
19世紀ロシアの生活百科』(その6)

Ф. А. Федосюк

Что непонятно у классиков

или

Энциклопедия русского быта XIX века

鈴木 淳 一
飯 島 由 大

これは「文化と言語」56号(2002年3月)、57号(2002年10月)、62号(2005年3月)、63号(2005年10月)、64号(2006年3月)に発表したフェドシューク著『古典作家の難解なところ、あるいは19世紀ロシアの生活百科』翻訳の続きである。9章、1章、2章、3章、4章に続いて、今回は5章を訳出することとした。今回の翻訳作業も、大学院生が主体となり、鈴木がそれに朱を入れるというスタイルでおこなった。5章は10節からなるが、飯島が1～4節、鈴木が5～10節を分担し、最後に鈴木が全体的な文体の統一を図った。

注についても前回同様である。訳注は[]という形でできる限り本文中に組み入れるようにしたが、より詳細な説明が必要と判断した場合は脚注をつけた。訳語だけで分かり難い場合はロシア語を並列するようにしたのも前回同様である。

第5章

土地と権力

ЗЕМЛИ И ВЛАСТИ

1 節

首都、県、州

столицы, губернии, области

喜劇『知恵の悲しみ Горе от ума』では腹を立てたファームウソフが、こう言明している——「こういった連中には断固禁じなければなるまい／首都の射程距離圏内にまで近づくことを Строжайше б запретил я этим господам/На выстрел подъезжать к столицам」[2 幕]。

「こういった連中」が誰のことかは明らかである。それは、チャツツキーのような連中に他ならない。ではこの首都とはどこのことか？ それはもちろんペテルブルクとモスクワのことである。これら二都市はともにロシアの首都とみなされていた。もしもペテルブルクが帝国随一の首都だったとすれば、モスクワは「古都 первопрестольная столица」と呼ばれていた。モスクワには太古来「玉座 престор」、つまり帝位があり、そこで冠載式やその他諸々の公的な儀式が執り行なわれていたし、いくつかの政府機関もおかれていたからである。したがってロシア文学の中で出会う「首都の洒落者 столичный франт」、「首都の新聞 столичные газеты」等々といった表現は、たんにペテルブルクだけではなく、モスクワにもまた同じように関係しているのである。

スウホヴォ＝コブィリンの喜劇『訴訟 дело』のタレールキンは、大声でこう叫んでいる——「我々の祖国にはですね、貴女さま、2つの首都と49の県があるのでございます В отечестве нашем считается, милостивая государыня, две столицы и 49 губерний」[3 幕4 場]。これは19世紀中葉のことである。〈県 губерния〉はピョートル I 世の時代にはすでに、ロシアの主要な地方行政単位となっていた。1917年までにはロシア帝国内の県の数78にものぼっ

た。県の他にも21の〈州 область〉があったが、州が位置していたのは国の辺境か(たとえば、ザカフカース州 Закавказская область、ザバイカル州 Забайкальская область)、あるいはコサック軍団の居住する地域(たとえば、ドン軍団州 область Войска Донского)であった。

県においてほとんど全権を掌握していたのは、〈県知事 губернатор〉であった。いくつかのとりわけ重要な県のトップには〈総督 генерал-губернатор〉が任命されたが、彼らは皇帝その人の代理人であり、県知事をも上回る権力者であった。『死せる魂 Мёртвые души』の未完に終わった第2巻では、チチコフの滞在する県都に、県内秩序の回復を目論む新任の総督がやってくる。ゴゴリは、県知事を筆頭に役人という役人を襲ったパニック、そして当然の報いを前にした彼らの恐怖を描いている。この場面にはゴゴリの幻影——皇帝によって任命された誠実にして善意に溢れた高官たちは、帝国を支配している無法状態を打ち負かすことができるのだというゴゴリの幻想——が反映されている。

19世紀の終わりから20世紀の初めにかけては、ペテルブルクとモスクワの総督は〈総司令官 главнокомандующий〉と呼ばれていた。レフ・トルストイは長篇『戦争と平和 Война и мир』にこの称号を持った実在の人物、フョードル・ロストプチン登場させている。彼は1812年から1814年まで、モスクワの総司令官の職にあった。

ときにはいくつかの県が一つに纏められ、総督を長とする〈総督府 генерал-губернаторство〉とされることもあった。その場合、県知事たちは総督の権力下におかれた。

1775年から1796年にかけては、〈代官 наместник〉を長とした〈代官府 наместничество〉が総督府とまったく同じ役割を果たしていた。フォンヴィージンの喜劇『親がかり Недоросль』では、プロスタコーワ夫人の領地を監査するために訪れたプラーヴジンが、こう自己紹介している——「私は当地の代官府の一員に任じられているのです Я определен членом в здешнем наместничестве」[2幕1場]。これはつまり、彼が全権を与えられた役人だと

いうことである。彼はプロスタコワ夫人に、政府の後見に委ねられた領地の経営から手を引くよう命じている〔5幕4場〕。

いくつかの県、とりわけ首都の所在県や国境を接する県を支配していたのは、〈武官知事 военный губернатор〉であったが、彼らは管轄地域に駐屯する部隊の指揮権をも持っていた。それ以外の県知事は、〈文官知事 гражданский губернатор〉と呼ばれた。

権力の枢要機関は第一首都のサンクト・ペテルブルクにあった。国家の独裁的主席は、「君主 монарх」、つまり〈皇帝 император〉であった。彼は、国民が恭しく「陛下 государь」(公式称号は〈皇帝陛下 государь-император〉)と呼ばなければならない〈帝王 царь〉であった。「帝王^{ツァーリ}」は非公式な称号である。1802年に設立された省庁の大臣は、1905年にいたるまで皇帝の直属下にあった。1905年になってやっと、諸々の革命的な出来事のあおりを受けて、「閣僚会議議長 председатель Совета Министров」のポストが設けられた。初代閣僚会議議長はヴィッテだが、ゴーリキーは彼を長篇『クリム・サムギンの生涯 Жизнь Клим Самгина』に登場させている。

諸々の政府機関の活動を監視していた帝国最高峰の国家機関は、〈元老院 Правительствующий сенат〉であった。元老院こそは最高司法機関であった。であればこそ、グリボエードフの『智恵の悲しみ』に出てくるファームウソフは、こう叫ぶのである——「元老院に訴状を提出するとしよう、各大臣たちにも、陛下にも訴え出るとしよう！ В Сенат подам, министрам, государю!」〔4幕／チャーツキーを娘ソフィヤからも、モスクワの社交界からも遠ざけるために、その不穏当な行状を元老院に訴え出ようということ〕。だが同じファームウソフはこう叫ぶ前に、モスクワの女性連を賞賛し、「彼女たちを元老院に出席させるために送り出すべきなのです！ Присутствовать пошлите их в Сенат!」と言明し、彼女らは元老院で立派に職務をこなすだろうと述べてもいるのである〔2幕〕。

トルストイの長篇『復活 Воскресение』には、ネフリュードフが最高裁判所としての元老院へ無駄足を運ぶ様子が描かれている。

2 節

省とその他の役所

МИНИСТЕРСТВА И ИНЫЕ ПРИСУТСТВЕННЫЕ МЕСТА

各省は、局、部、課に分けられていた。

〈局 департамент〉は、大臣の活動の最重要方針を司っていた。〈局長 директор департамента〉の地位は、大臣の地位同様、芸術作品の主人公たちにおいそれと「授ける присваивать」わけにはゆかないほど高い地位であった。「省の最重要ポストの一つ одно из важнейших мест в министерстве」[1編5章]に就いているアンナの夫、カレーニンが局のトップの座にあったと結論づけられるのは、ただ間接的な資料の基づいてのことではない。

ゴーゴリの中篇『外套 Шинель』が次のようなアイロニカルな出だしから始まるのも偶然ではない——「とある局に…… だがどんな局かは言わぬが花である。あらゆる種類の局や連隊、事務所よりも、要するにあらゆる種類の役人階級よりも、腹を立てやすい連中などいないからである。今ではもはやどんな人でもみんな、自分のことをとやかく言われると、社会全体が侮辱されたと考えてしまう В департаменте... но лучше не называть, в каком департаменте. Ничего нет сердитее всякого рода департаментов, полков, канцелярий и, словом, всякого рода должностных сословий. Теперь уж всякий частный человек считает в лице своем оскорбленным все общество」。こうして読者にとってもまた、不運なアカーキー・アカーキエヴィチがどのような局に勤めていたのかは謎のままである。とはいえこのことは、物語にとって何らの意味も持っていないのである。

自慢話を始めたフレスタコフは、郡役所のある町で自分を権威ある人物に見せかけようと、こう言明している——「かつて小生は、一つの局を取り仕切っていたことさえあります Один раз я даже управлял департаментом」[『検察官』3幕6場]。局長そのものに他ならなかった！ということである。

〈部 отделение〉とは、局の下位組織で、その機能は一層狭められていた。

グリボエードフの『智恵の悲しみ』では、モルチャーリンがフォマー・フォミーチ某を賞賛しながら、彼がチャーツキーとは違って、「3人の大臣の下で部長を務めた при трех министрах был начальник отделения」人物だと指摘している[3幕1場]。ゴゴリの『狂人の手記 Записки сумасшедшего』では小役人のポプリーシチンを、「君はまったくの零で、それ以外の何者でもないじゃないか Ведь ты нуль, более ничего」と言って、「部長が激怒させて разбесил начальник отделения」いる[11月6日付の日記]。破廉恥な上司に口答える度胸もないポプリーシチンは、自らの激しい怒りを日記に吐露するのである。

ゲルツェンは『過去と思索 Былое и думы』にこう書いている——「部長たちは心配そうに鞆を抱えて走り回り、課長たちに不満たらたらであった。課長たちはたとえば、必死に書きまくっているのだが、実際には仕事に押し潰されてしまっていて、同じ机に向かったまま死んでしまうだろう、少なくともとりわけ幸せな事態に見舞われることもなく20年ほど同じ机に向かい続けることになるだろう、という見通しを持っていた Начальники отделений озабоченно бежали с портфелями, были недовольны столоначальниками, столоначальники писали, писали, действительно были завалены работой и имели перспективу умереть за теми же столами — по крайней мере, просидеть без особенно счастливых обстоятельств лет двадцать」[4部26章「ペテルブルク」1節「警告」]。

〈課長 столоначальник〉を長とする〈課 стол〉は、省やその他多くの政府所轄官庁の最下位職位であった。主な執行作業はそれぞれの課で行なわれた。そもそもは「課」の全職員が実際に、上座に課長が鎮座する一つの長い机に向かっていたのだが、やがて「机 стол」という呼称が家具の範疇から分離して、職務区分を意味するようになったのである。ちなみに、まったく同じことが、そもそもはせいぜい事務用家具を意味するものでしかなかった「事務机 бюро」、「勘定台 контора」という単語にも起こっている[現代ではともに「事務所」の意]。ゴンチャローフの『懸崖 Обрыв』の中で、ライスキーは「文官職

への異動を申請し、アヤーノフの課へ配属された подал к переводу в статскую службу и был посажен к Аянову в стол」という一節を読むと[1編13章]、現代の読者は首を捻ってしまう[現在 стол に「課」の意味はないので]。とはいえ現在でも依然として「予約注文課 стол заказов」、「遺失物保管課 стол находок」、「案内課 стол справок」といった課が存在し続けているのである。

課長職というのは、行政キャリアにおける最初の指導的地位であり、平役人の誰もが熱望する役職であった。オストロフスキーの『実入りのいい職 Доходное место』に出てくる若い無定見な出世主義ベログゥーボフは、どんな手段を使っても課長になってやろうと夢見ている。フィアンセであるユーリニカの、課長とはどんなものかという質問に対し、彼は曖昧にこう答えている——「それは最高の等級のことです Это (, говорит,) первый сорт-с」[2幕1場]¹。この職位がその俸給や職業的未来展望以外にも魅力的だったのは、この職に就くとしばしば賄賂を自由に扱えたからであった。オストロフスキーの『深淵 Пучина』に出てくる役人のキセーリニコフは、こう言っている——「毎週土曜日に課長は実入りを請願人と分け合っているが、私は他の人よりずっと大人しいものだから、お零れに預れないでいる По субботам столоначальник делит доходы с просителями, да я посмирнее, так обделяет」[2幕5場]。

課長はときとして皮肉たっぷりに、〈所事務官 повытчик〉という非公式的な昔ながらの呼称で呼ばれることもあった。チチコフは若いとき、「たまたま石のように冷たい無慈悲の権化とも言うべき毫碌甚だしい所事務官の部下になった попал под начальство уже престарелому повытчику, который был образ какой-то каменной бесчувственности」ことがあった[1部11章]。チェルヌィシェフスキーの『中篇の中の中篇 Повесть в повести』では次のような一節に出会う——「私は当時、当時の蔑称で言えば所事務官、本来の職名で言えば課長であった Я тогда был повытчиком, по тогдашнему неблагородному

¹ これはベログゥーボフがユーリニカに直接言った台詞としてではなく、ユーリニカの姉妹ポリーナへの台詞の中に、ベログゥーボフが言った言葉として出てくるものである(ために говорит が挿入されている)。

прозванию, а собственно столоначальником」。

課長よりも重要度の低い職位に〈課長補佐 помощник столоначальника〉というのがあった。チェルヌィシェフスキーの長篇『何をなすべきか? Что делать』では、哀れにして打ちひしがれた人間であるヴェーラ・パーヴロヴナの父が、「課長補佐として勤めていた служил помощником столоначальника」[1章1節]。ゴーゴリの『外套 Шенль』にはまた違ったタイプの役人が導入されている——「……役人の一人、どこかの課長補佐を務める男が、おそらくは自分は少しも高慢な男ではなく、自分より目下の者とだって付き合えることを示すために ...один из чиновников, какой-то даже помощник столоначальника, вероятно, для того, чтобы показать, что он ничуть не гордец и знает даже с низшими себя」、自分の名の日の祝宴にアカーキー・アカーキエヴィチを招待する。アカーキーはそこで自分の新調した外套をひけらかすことのできるチャンスに恵まれるのだが、この訪問には、周知のように、悲しい結末が待っている。アカーキーは訪問先からの帰り道、外套を盗まれてしまうのである。

役人たちの職場である政府機関は〈官庁 присутствие〉、あるいは〈役所 присутственное место〉と呼ばれた。どんな県都や郡都においても、役所に入った建物は目立つ場所に立っていたが、そうした建物の多くが現在まで保存されている。『死せる魂』の舞台となっている県都では、役所に入った建物は「大きな三階建ての石造建築で、その建物内に勤める人々の清廉潔白さを示すためであろうが、建物全体がチョークのように純白であった большой трехэтажный каменный дом, весь белый, как мел, вероятно для изображения чистоты душ помещавшихся в нем должностей」[1部7章]。

「官庁へ出かけた уехал в присутствие」とか「官庁に勤務していた сидел в присутствии」といった表現——これらは、ロシア古典文学の頁をめくるときに出会う表現である。ときには〈職場 должность〉という語もまた、「官庁」と同様の意味を持つことがあった。ドストエフスキーの『貧しき人々 Бедные люди』では、世間に打ちのめされたマカール・デーヴシキンが、こう告白し

ている——「職場には入るときはですね、横向き、横向きになるんです В должность-то вхожу когда, так бочком-бочком」[8月4日ワルワーラ宛]。レールモン
トフの中篇『公爵令嬢リゴフスカヤ Княгина Лиговская』には、「彼女の父
親は職場に出かけた отец ее уехал к должности」という一節がある[3章]。

「職場へ к должности」というのは、「官庁へ в присутствие」と同様に、
「勤め先へ на службу」、「自分の勤める政府機関へ в своё учреждение」とい
うことを意味したのである。

作家たちは「官庁」という用語を具体化せずに、政府機関全体を意味させる
場合がしばしばであった。たとえば読者は、『アンナ・カレニナ Анна Каре-
нина』においてスチーフ・オブロンスキーが「さほど高い官等ではないが、モ
スクワにある官庁の一つで長官を в небольшом чине, начальник одного из
московских присутствий」務めていることを知っている[1編5章]。彼はまた
他の箇所では「官庁の議長 председатель присутствия」と呼ばれてもいる。

3 節

県の権力

Губернские власти

〈県知事 губернатор〉は、県のトップ、あるいは法の定義をそのまま借用
するなら「県の主人 хозяин губернии」であり、もっとも影響力の強い省、つ
まりは内務省に直属していた。県知事は〈県庁 губернское правление〉を直
轄していた。ゴーゴリの『死せる魂』には、県行政のありようをまざまざと浮
かび上がらせる鮮明な描写がある。そこには、愚鈍で独りよがりな県知事の
瑞々しい姿も描かれている[1、11章]。またトゥルゲーネフは長篇『父と子』
の中で、県知事コリャージンの独裁的な人となりを見事に描破している[12
章]。

県知事を補佐していたのは〈副知事 вице-губертатор〉だが、陰では「副
知事」を略して〈副 вице〉と呼ばれていた。口さがないソバケーヴィチはチチ

コフに、チチコフが褒めそやす知事についてこう言っている——「あいつはまだ副知事ですし、あいつはゴグとマゴグですよ Он да еще вице-губернатор — это Гога и Магога」[1部5章]。ソバケーヴィチがここで念頭においているのは、獐猛さと残忍さで比類なき二人の王に関する聖書寓話の登場人物のことである[旧約「エゼキエル書」38-39章、新約「ヨハネ黙示録」20章7-9節]²。トルストイの長篇『復活』では、弁護士ファナーリンがネフリュードフにこう言っている——「現在知事は不在で、副が職務を代行しています。しかしこの副がまったくの木偶坊でして、そのことはあなたにもどうにもできないでしょうよ Теперь нет губернатора, правит должностью виц. Но это такой дремучий дурак, что вы с этим едва ли что сделаете」[1編45章]。

県庁には次の3つの機関も所属していた。

一つ目は、税の徴収と県のその他の財政問題を管轄していた〈**県税務庁 казенная палата**〉である。財政の直接的管轄権は、税務長官の職務を非常に権威のある魅力的なものにしていた。ゴンチャロフの長篇『懸崖』では、税務長官ニール・アンデレーエヴィチ・トイチコフについてこう述べられている——「彼もまた自分のポケットの中で税務庁を取り仕切っていて、それはさながら実の姪を身包み剥がして、精神病院へ閉じ込めてしまったかのような按配だった в кармане у себя он тоже казенную палату завел, да будто родную племянницу обобрал и в сумашедший дом запер」[1部11章]。ゴーゴリの戯曲『どん底』では、身を持ち崩し、一文無しになった男爵^{バロン}がこう回想している——「県税務庁に勤めていたときは…… 制服に記章のついた制帽…… それから公金を横領してしまったときは、囚人服を着せられ…… その後はほらこんな格好をしているというわけです…… Служил в казенной палате... мундир,

² ただし「エゼキエル書」ではマゴグは地名で、ゴグはマゴグの王ということになっているし、新約ではゴグもマゴグも民族名となっている。したがってフェドシュークの記述が直接的はどのような聖書寓話に基づいているのかは不明。いずれにしても現在「ゴグとマゴグ」(表記は гога и магога, гог и магор, гога-магога, гог-магор のいずれか)は、有無を言わせぬ独裁者、ワンマンという転義で使用される。

фуражка с кокардой... растратил казенные деньги, — надели на меня арестанский халат... потом одел вот это...」[4幕]。

二つ目は、あらゆる民事訴訟、および民間商業を管轄していた〈民事院 гражданская палата〉、あるいは〈民事裁判所 палата гражданского суда〉である。『死せる魂』第7章で、生きた農奴と偽って死んだ農奴を購入するための手続きにチチコフが訪れるのは、まさしくここに他ならない。チチコフはこの民事院長、あるいは民事裁判長のイワン・グリゴリーエヴィチとすでに昵懇の間柄になっており、そのことによって用件はどんどん進捗したばかりか、チチコフはこうした場合につきものの多額の賄賂も支払わずに済んだのであった。

三つ目は、刑事事件を審理していた〈刑事院 уголовная палата〉または〈刑事裁判所 палата уголовного суда〉である。

地方の教育施設やあらゆる種類の医療、および慈善関係施設を管轄する〈社会保護庁 приказ общественного призрения〉は、県知事に直属していた。この官庁は、自前の乏しい予算を増やすために金融事業に従事する権利を持っていた。このことを勘案すれば、「千ルーブル」貸して欲しいというフレスタコーフの依頼に対し、ドープチンスキーが次のように答えているのも納得できるであろう——「……私のお金はですね、どうか分かっていただきたいのですが、社会保護庁に預けてあるのです ...Мои деньги, если изволите знать, положены в приказ общественного призрения」[4幕7場]。これはもちろん、自由になる資産を利息目当てに社会保護庁に預けたというドープチンスキーの言い分が嘘ではないということである。

〈県検事 губернский прокурор〉は公式的には知事に帰属しない存在で、法の執行状況を監視し、県内のあらゆる背任行為を阻止する義務があった。彼がこうした義務遂行の責任を負っていたのは司法省に対してである。『死せる魂』に出てくるゲジゲジ眉毛の県検事は、ペテン師チチコフの言い草を信じ込み、自分の職務遂行を怠ってしまった。チチコフの陰謀が暴露された際に、それに対して彼が極端なまでに過激な反応を示し、発作を起こした挙句に死んでしま

うのは、まさしくそのために他ならない[10章]。

1889年になると、各県庁に付属する形で、農民階級の諸機関を監督する〈農事監督庁 присутствие по крестьянским делам〉が設置された。チェーホフの戯曲『イワーノフ』の主人公は、この官庁の〈常任メンバー-непременный член〉(つまり選挙によって選ばれたメンバーではなく、任命されたメンバー)である。確かに戯曲の中で彼の仕事ぶりについては言及されていないが、社会的な地位は定められており、彼は役所勤務を副業とせざるを得ない地主とされている。チェーホフの短編『悪夢 Кашмар』の主人公クウニンもまたイワーノフと同様の境遇で、領地を抵当に取られ、農事監督庁の常任メンバーとしての俸給だけで暮らしている。

この官庁の諸々の職務には、徴税の監督というのも入っていた。チェーホフの短篇『悪者 Злоумышленник』の主人公は、どうして自分が収監されようとしているのかを理解できず、判事にこう言っている——「誉あるお方さま、もしも未納金のことをお疑いでしたら、村長の言うことなんか信じないでおくんなさい…… どうか常任メンバーにお尋ねになってくださいまし А ежели вы насчет недоимок сомневаетесь, ваше благородие, то не верьте старосте... Вы господина неперменного члена спросите」。

4 節

郡当局

Уездные власти

県は〈郡 уезд〉に分割されていた。郡の行政の中心は郡都であった。郡都、あるいは県都以外の都市(いわゆる〈地方都市 заштатный город〉)を管理統率していたのは、〈市長 городничий〉であるが、市長を務めていたのは、市の問題全般を取り仕切る警察官であった。

市長が読者にとって馴染み深いのは、何よりもゴーゴリの『検察官 Ревизор』を通してである。市長は市の全権的主人である。郡役所の全役人が市長

の配下にあり、市長は国民学校 народные училища、あるいは病院や養護施設 приют、養老院 богадельня などの〈慈善施設 богоугодные заведения〉といった、一見警察とは無縁に思える施設の責任者でもあった。

さらにまた1785年以降になると、県都や郡都には選挙機関も存在した。その選挙機関は〈6人市議会 шестигласная дума〉(6つの「母音 гласный」、すなわち様々な階級から選抜された6人の議員で構成される議会)と呼ばれ、〈市議会議長 городская голова〉がトップを務めた。この市議会議長は、『検察官』の劇中に姿こそ現さないものの、話題として取り上げられてはいる。偽検察官を出迎えるにあたって、郡裁判官のリャープキン=チャープキンは、「市議会議長に聖職者階級、商人階級を前面に並ばせるよう вперед пустить голову, духовенство, купечество」提案するのだが、それに対して市長はこう反論している——「いやいや、そうではなく、どうか小生を前面に立たせていただきたい Нет, нет: позвольте уж мне самому」[1幕3場]。チチコフは、「聖体礼儀の後に市議会議長の催した軽食の席にも立ち寄ったが、その軽食もまた正餐といってよいほど豪華なものだった побывал и на закуске после обедни, данной городским головой, которая тоже стоила обеда」[1部1章]。しかし1870年の改革までの市議会や市議会議長の権力は、甚だ曖昧で無きに等しいものであった。実権を握っていたのは、選挙で選ばれた人々ではなく、政府機関によって任命された役人たちである。郡都で実権を握っていた役人と言え、それは法律など屁とも思わない市長であった。

ロシア文学におけるもう一人の華々しい市長像を挙げるとすれば、オストロフスキーの喜劇『熱き心 Гроющее сердце』に出てくるグラドボーエフであろう。彼は粗暴にして無知蒙昧、と同時に狡猾にして機転の利く役人である。彼は商人のフルィノフにこう言っている——「お前に法があるなら、俺にはステッキがある У тебя закон, а у меня костыль」[4幕1場]。

レスコーフはその短篇『石頭 Однодум』にこう書いている——「遠い遠い遙か昔…… ロシアのどんな小都市でももっとも重要な人物と言え、それは市長のことであった。これまで何度も言われてきたし、誰にも異存がないのは、

ロシア人の多くがどんな市長でも『国家で三番目の権力者』だと考えているということである В ту отдаленную пору... самое главное лицо в каждом русском городишке был городничий. Не раз было сказано и никем не оспорено, что, по понятию многих русских людей, каждый городничий был «третье лицо в государстве»[3章]。国民の理解するところによれば、国家権力というのはその根源たる君主から次のように枝分かれしていた。すなわち、国家の主席は国家全体を統治する陛下、陛下に続く第二席を占めるのは県を統治する県知事、そして県知事のすぐ後に続いて第三席を占めるのは「市を掌握している сидящий на городе」市長、という具合である。

郡都には〈郡裁判所 уездный суд〉が置かれていた。この郡裁判所は1863年まで、貴族にとっての第一審裁判所の役割を担っていた。郡裁判所は軽い刑事事件や民事事件の処理、何よりも土地所有を巡る係争の処理にあたった。富裕な地主に買収された郡裁判がどのようなものだったかについては、プーシキンの『ドゥブロフスキー Дубровский』第2章が雄弁に語ってくれている。そこではいかなる審理も、いかなる原告側と被告側の弁論も、いかなる弁護も行なわれず、郡裁判所に召喚されたアンドレイ・ガヴリーロヴィチ・ドゥブロフスキーは無理矢理、彼の領地の合法的剥奪を告げる出来合いの判決を聞かされるはめになるのである。被害者に残されているのはただ上告の権利だけ、つまり上級審へ判決の抗告を訴え出ることだけである。

ゴーゴリは『ミルゴロド Миргород』所収の有名な中編の中で、イワン・イワーノヴィチとイワン・ニキーフォロヴィチを和解させようと奮闘する〈郡裁判所 поветовый суд(уездный судと同じ)〉³の審議状況をユーモアラスに描写している[『イワン・イワーノヴィチとイワン・ニキーフォロヴィチが喧嘩をした話』第4章「ミールゴロト郡裁判所で起こった事件の顛末」]。

〈郡裁判官 уездный судья〉は、郡都では市長に次ぐ権力者だった。『検察

³ ロシアにおける「郡 уезд」のことを、ウクライナ地方では「郡 повет」と言っていたので、「郡裁判 уездный суд」と「郡裁判 поветовый суд」は同一内容を指す。

官』でこの職務に就いているのはリャープキン=チャープキンだが、彼は仕事より狩に夢中であり、賄賂としてボルゾイ犬の子犬を受け取っていることを隠そうともしない[1幕1場]。恐ろしい検察のことを聞かされても、彼は平然としてこう言い放つ——「実際のところ、いったい誰が郡裁判所に立ち寄るというんですか？ たとえ何かの書類を覗き込んだって、人生が楽しくなりやしませんからね…… ソロモン王その人にだって、書類のどこが本当で、どこが嘘かなんて分かりっこありませんからね В самом деле, кто зайдет в уездный суд? А если и заглянет в какую-нибудь бумагу, так он жизни не будет рад... Сам Соломон не разрешит, что в ней правда и что неправда」[1幕3場]。郡裁判官のリャープキン=チャープキンには〈陪席裁判官 заседатель〉が仕えているが、市長の言によれば、この陪席裁判官は「たった今ワイン工場から出てきたばかりというような匂い такой запах, как будто он сейчас вышел из винокуренного завода」[1幕1場]をぶんぶんさせているのである。

『検察官』にはこの他にもさらに、様々な郡当局の代表者たちが登場している。たとえば、「狡猾なペテン師 проныра и плут」のゼムリャニーカである。彼は、諸々の慈善施設、ダーリの説明によれば、「老人や不具者、病人や乞食といった庇護を必要とする人々を世話するための」諸施設を統括する立場にある。またフローポフは〈学校監督官 смотритель училищ〉だが、おどおどした惨めな人間で、こう嘯いている——「どうか教育関係の仕事だけのご勘弁願いたいものです。あらゆることが心配の種ですからね Не приведи Бог служить по ученой части, всего боишься」[1幕1場]。これはニコライ I 世時代特有のフレーズである。当時は教育施設が、「自由思想 вольнодумство」の発展を警戒する権力側の厳しい監視下に置かれていたのであった。

市長の権力は、その職務名自体にも示されているように、市の領域内に限定されていた。だとすれば、郡の残りの部分を管轄していたのはいったい誰か？

1862年まで(市以外の)郡の行政権力、および警察権力のトップに立っていたのは、〈郡警察署長 капитан-исправник〉であった。実生活でも文学の世界でも、彼はたんに〈署長 исправник〉と呼ばれることがしばしばであった。

彼には2～3人の助手、すなわち〈地方自治会代表委員 земский заседатель〉が付き従っていた。署長や代表委員は当地の貴族たちによって身内から選出され、ともに有給であった。

臆病なコロボチカは、思いがけずにひょっこり現れたチチコフを当地の代表委員と勘違いしている[『死せる魂』1部3章]。

『ドゥブローフスキー』では署長が——それは「背が高く太った、赤ら顔に口ひげをたくわえた50がらみの男 высокий и толстый мужчина лет пятидесяти с красным лицом и в усах」なのだが——、陪席裁判官シャバーシキン、代理人、書記と一緒にキステニョーフカへ、トロエクウーロフに対するドゥブローフスキーの領地引渡しの手続きをするためにやってくる[5章]。

ノズドリョーフの召使たちがチチコフを殴ろうとしたとき、それを中断するのは、郡警察署長の到着である。署長はノズドリョーフに、ノズドリョーフがかつて地主マクシーモフを殴打した事で訴えられている旨を告げている[1部4章]。

「署長 исправник」という言葉(「職務を遂行する Исправлять должность」、つまり職責を全うする、勤務するという表現からの派生語)は、トゥルゲーネフの短篇『無風 Затишье』に引かれている地方の郡警察署長についてのエピソードにおいて見事に活用されている[1章]——

……貴族の選挙で晴れやかに

慶賀されたのも故なきことにあらず。

彼がたらふく飲み食いできるのも……

もしや彼が署長だからではあるまいか？

...недаром славно

Дворянскими выбором почтён:

Он пьёт и кушает исправно...

Так как же не исправник он?

1837年以降、地方自治会代表委員に代わって郡警察署長の助手を務めたのは〈郡警察分区署長 становой пристав〉で、分区署長はそれぞれの〈分区 стан〉、つまり警察管区を取り仕切った。郡は2～3の警察管区に分けられていた。

ピーセムスキーの『千人の農奴 Тысяча душ』では、次のように言われている——「貴族の代表委員がいた。彼らは下級収賄官吏と呼ばれていた。彼らの代わりに郡警察分区署長たちが連れてこられた。彼らもまた下級収賄官吏と呼ばれているが、これ以上はもはやどうしようもできまい Были дворянские заседатели — их куроцапами звали, вместо них становых приставов завели — тоже куроцапами зовут, ничего не поделаешь」。

1863年まで郡警察署長は〈下級地方裁判所 низший земский суд〉のトップに立っていた。これは、貴族以外の全階級を統括する郡の行政機構であり、警察機構であった。この「下級地方裁判所」を前述した「郡裁判所 уездный суд」と混同してはならない。下級地方裁判所は郡の中でやり放題のことをやっていた。ネクラースフの物語詩『誰にルーシは住みよいか Кому на Руси жить хорошо』には、次のような一節がある——

「私たちの雌鶏はどこ？」——

娘たちが叫んでいる。

——喚くんじゃないよ、この馬鹿女たち！

地方裁判所が食べちまったのさ。

荷馬車も取っていっちまったし、

兵隊さんを泊らせる約束もしたんだとさ……

聖なるルーシに暮らすのは

国民にとってなんて素敵なことか！

«Где же наши куры?» —

Девчонки орут.

— Не орите, дуры！

Съел их земский суд;

Взял ещё подводу,

Да сулил постой...

Славно жить народу

На Руси святой !

「大宴会(第2部より)Пир — на весь мир (из второй части)」、1章「辛いときには辛い歌 Горького время — горькое песни」の中の「楽しい歌 Веселая」]

1863 年、下級地方裁判所は市長の職ともども廃止された。それ以来〈郡警察署長 **уездный исправник/земский исправник**〉の権力は、郡都にまで波及することになった。政府によって直接任命された署長、すなわち〈郡警察長官 **начальники уездной полиции**〉は、1917 年に至るまでずっと存在し続けた。

1878 年、郡警察分区署長は、〈郡巡查 **урядник**〉、すなわち村の警官を指揮下におくことになった。この「郡巡查 **урядник**」を、言葉は同じながら、彼らとは縁もゆかりもない「コサック軍下士官 **урядник**」と混同してはいけない。

反動の時代であった 1889 年、村における不満の膨張と革命的な状況の成熟を背景に、政府は郡に〈地方自治会長 **земский начальник**〉という職務を導入し、貴族の中から任命した。地方自治会長は、郡全体の農民に対する行政権力、および司法権力を一手に掌握し、農民選出の村長を任命し、裁判と判決を迅速に行なった。ロシア文学のどんな作品にも、地方自治会長は極悪非道な村の支配者として描かれている。地方自治会長は、気に入らない農民なら誰でも投獄することができたのである。

地方自治会長の手前勝手や鉄面皮については、短篇『キリールカ Кириллка』や長篇『クリム・サムギンの生涯 Жизнь Клима Самгина』といったゴーリキーの作品の中で数多く目の当たりにすることができる。中編『母 Мать』には、「自分の馬が村を引かれていくときに、百姓たちのその馬にお辞儀をさせ、お辞儀をしない百姓を投獄していたのさ **заставлял мужиков кланяться лошади его, когда ее по деревне вели, а кто не кланялся, того под**

арест сажал」 地方自治会長が登場している〔2部6章／これは母の台詞の一節〕。

5 節

市警察

Городская полиция

市の警察は、田舎の警察機構とは別物であった。

1917年まで多少とも大きな都市はいくつかの〈大区 часть〉、すなわち一種の区画に分割されていた。各大区の警察のトップに立っていたのは〈大区署長 частный пристав〉であった。ここで言う「チャースヌィーчастный」とは、「個人に属した」という現代的意味の形容詞ではなく、警察の担当地域単位を示す「大区」から派生した形容詞である。

郡の小都市は大区に分割されていなかった。それにもかかわらずそこにもまた、市長のもっとも身近な助手としての大区署長がいた。『検察官』に登場するウホヴェールトフがそれで、市長は彼を市の秩序を回復させるために即刻呼び出している〔1幕5場〕。

大区署長とその部下たちは〈大区署 частный дом〉に詰めていた。各大区署には収容スペース、すなわち〈留置場 съезжая〉があったが、そこは寒かったので巷ではしばしば〈氷室 холодная〉とか〈シベリア部屋 сибирская〉と呼ばれていた。

ウホヴェールトフは市長に、プローホロフ巡査は「大区署にいますが、ただ仕事には何の役にも立てません…… в частном доме, да только к делу не может быть употреблен...」(死ぬほど酔っ払っている)と報告している〔1幕4場〕⁴。この応答のユーモアは現代の読者や観客には伝わらない。現代の読者や観客には、この応答が前世紀に爆発的哄笑を呼び起こしたという事実疑問符

⁴ これはフェドシュークの勘違いと思われる。引用されている台詞を口にするのは、大区署長 частный пристав のウホヴェールトフではなく、その配下の中区巡査 квартальный である。

を付さず、ただ秩序の番人自身が泥酔して警察に運び込まれた様子を脳裡に描いてみるのが関の山であろう！ それでも我々読者や観客は、その無知に任せて、泥酔したプローホロフはいったい「誰の私邸 *чей частный дом*」に収容されたのだろうかと思像を逞しくしてしまう。

ましてや、「チャースヌイー・ドーム *частный дом*」という表現がかつて「大区署」という意味だけではなく、「個人所有の家 *дом, принадлежащий частному лицу*」という意味でも使われていたとすれば、それはなおさらのことである。たとえば、トゥルゲーネフの短篇『クララ・ミーリチ』には、コンサートが催される「オストジェンコ村にある私邸の大広間 *большая зала в частном доме на Остоженке*」が描かれているが[4章]、この「チャースヌイー・ドーム」が「警察署 *полицейская контора*」でないことはもちろんである。

フレスタコフが、市長に旅籠居酒屋から市長宅へ河岸を変えるよう勧められたとき、次のように返答しているのも偶然ではない——「私にはこの酒場よりも私宅の方がずっと快適です *Мне гораздо приятнее в приватном доме, чем в этом кабаке*」[『検察官』2幕8場]。この場合、「チャースヌイー・ドームで *в частном доме*」という言い方は、危険な両義性を許容してしまいかねないからである。

ゲルツェンは『過去と思索』に、彼の伯父(元老院議員)と父親が農奴のことで、『大区署』の卑劣な手段に訴えるのがつねであった *прибегали к гнусному средству «частного дома»* [1部「子供部屋と大学」、2章「少年時代」、4節「ヤーコヴレフ家の召使たち」、すなわち農奴を過失の廉で鞭打ってもらうために大区署へ送り込んだ、と書いている。このように、一見したところ何の罪もない「チャースヌイー・ドーム」という表現も、かつては極悪非道な意味を持っていたのである。

警察の地区はいくつかの〈中区 *квартал*〉に分割されていて、そのトップは〈中区署主任 *квартальный надзиратель*〉であり、その助手は〈中区署中尉 *квартальный поручик*〉と呼ばれた。巷間では中区署主任はただたんに「中区 *квартальный*」、あるいは侮蔑的に〈中区っぽ *кварташек*〉と呼ばれた。一

つの警察大区に4～5つの中区が含まれていた。『検察官』には、スヴィストゥノーフ、プーゴヴィツィン、デルジモールダという3人の中区巡査が登場する。デルジモールダという姓は、愚鈍で意地悪な警官の同義語となった⁵。

オストロフスキーの喜劇『1グロシもなかったところに不意に1アルトーンが舞い込んだ Не было ни гроша, да вдруг алтын』[「文化と言語」64号125頁参照]に出てくる中区巡査は、チーグリー・リヴォーヴィチ・リュートフと命名されている。これは、「名は体を表す」を地でゆくような見事な命名と言えよう⁶。彼は「がし官 ундер」、つまり「下士官 унтер-офицер」である。

もっとも小さな警察の管轄区は〈小区 околоток/околодок〉で、そのトップに立っていたのは〈小区署主任 околоточный надзиратель〉だが、これはどこにでもあったわけではなく、大都市だけの管轄区であった。チャーホフの短編『カメレオン』ではこの役職が風刺的に扱われている。

1862年まで大都市の派出所で立ち番勤務をする平警官は、〈交番巡査 будочник/буточник〉と呼ばれた。「番小屋 будка」という語から派生した呼称である。この陰鬱であると同時に滑稽な人物像に、ロシア文学は少なからぬ頁を割いている。〈斧槍 алебарда〉と呼ばれる先端に斧をつけた長い槍で武装した交番巡査は、縞模様に彩色された〈交番 будка〉の哨所に詰めていた。しかし大抵の場合交番は、外見上は菜園に囲まれた一般住宅と変わらず、冬ともなれば木造、あるいは石造の交番には暖房が入るようになっていた。交番巡査はただたんに哨所に詰めていただけではない。彼はまた交番の中で家族と生活

⁵ 「スヴィストゥノーフ Свистунов」は「スヴィストゥーン(口笛好き、口笛をよく吹く人) свистун」から、「プーゴヴィツィン Пуговицын」は「プーゴヴィツァ(ボタン) пуговица」から、「デルジモールダ Держиморда」は「モールダ(ひどい顔) морда」と「デルジャーチ(持っている) держать」の結合から、それぞれに派生させて作った苗字。

⁶ 「チーグリー-Тигрий」は「チーグル(虎) тигр」、「リヴォーヴィチ Львович」は「レフ(ライオン) лев」、「リュートフ Лютов」は「リュートイー(残忍な) лютый」からの派生語で、「凶暴家の獅子男の息子の虎男」とでも訳せるから、まさしく極悪非道な中区巡査に相応しい名前と言える。

をともしてもいたのである。「交番巡査」というのは非公式的な呼称で、しばしば〈おまわり бутарь〉とも呼ばれたが、どちらも派出所の立ち番警官には腹に据えかねる呼名であった。

交番巡査の場合、卑屈さが無作法や収賄、飲酒、殴打などと結合していた。交番巡査の典型的な人物像は、ゴーゴリの中篇『鼻』や『外套』、それにプーシキンの中篇『棺桶屋』『ペールキン物語』に輪郭鮮やかに描かれている。

ゲルツェンは、権力者たちの知的狭隘さの下に樹立された専制国家の警察機構の本質を強調しようとして、ニコライ I 世を「交番巡査の交番巡査 будочник будочников」と呼んでいる。

警察のもっとも低い位として、警察書類の配達を受け持ち、様々な用事の使い走りをした〈配達巡査 хожалый〉というのもあった。トゥルゲーネフの『ムウムー Муму』では、ゲラシムが奇妙な行動をとるようになると、執事が「万が一のために на всякий случай」配達巡査を呼びにやっている。

革命以前は警察を支援するために、地主屋敷 10 世帯から一人の割合で、町人から〈十世帯頭 десяткий〉が選出されていた。ゴーゴリの『検察官』では市長が中区巡査に、チチコフの逗留する旅籠居酒屋へ通じる街路を清掃させるために十世帯頭を連れてくるよう命じている[1幕4場]。

県都の警察のトップは、〈警視監 полицеймейстер(口語では полицмейстер)〉と呼ばれた。ペテルブルクやモスクワには数人の警視監がいて、彼らはそもそもは〈警視総監 обер-полицмейстер〉の、1905 年以降は〈特別市長 градоначальник〉の配下にあった。『死せる魂』に出てくる警視監は、上役と言えは県知事だけで、途轍もなく大きな権力を持っている。そこには、警視監が「市民に災難となって降りかかり солоно пришелся обывателям города」、彼が不断のゆすりばかりで商人たちから金を巻き上げ、何不自由なく暮らしている様子が描かれている。ゴーゴリは皮肉たっぷりにこう書いている——「警視監はある意味では市の父親であり、慈善家であった。彼にとって市民の間にいるのは我が家にいるも同然で、ちょっとした商店へもマーケットへも、自分の倉庫さながらに出入りしていた Полицеймейстер был некоторым

образом отец и благодатель в городе. Он был среди граждан совершенно как в родной семье, а в лавки и в гостиный двор наведывался как в собственную кладовую」[1部7章]。

ゴーリキーは『最後の人々Последние』という特徴的な題名の戯曲の中で⁷、ゴゴリの場合とはまったく異なった劇的な警視監像を描いている。零落した貴族のイワン・コロミーツェフは警察に勤務し始め、警視監という高い地位まで上り詰めると、「瞬く間に身を持ち崩し、墮落し切ってしまった быстро развратился, прогнул」[1幕/イワンの妻ソフィヤの台詞]。革命軍の兵士たちが彼に発砲しようとしても、父親の存在を恥と考える実の娘たちは彼に背を向けてしまう。戯曲の舞台は、1905～1907年の革命直後に設定されている。

警察の職階に通曉してしまえば、外套を奪われても、訴え出るべき人を知らない『外套』の主人公アカーキー・アカーキエヴィチの苦難が、より一層切実に実感できるのではなかろうか。彼は中区巡査を信じる気になれず、大区署長は彼の言い分に耳を貸さず、また將軍位にある「要人 значительное лицо」——おそらくはペテルブルクの警視監の一人、あるいはもしかしたら警視總監が想定されているに違いない——この「要人」が彼を激しく叱責したために、結局「彼は手足の感覚を失い он не слышал ни рук, ни ног」、まもなく風邪を引いて死んでしまうのだから。

1884年に至るまで両首都の警察を取り仕切っていたのは、〈警察庁 Управа благочиния〉であった。『鼻』の主人公コワリョーフ中佐が失踪した鼻の件で最初に訴え出ようとするのが、まさしくこの警察庁に他ならない。

ロシア古典文学に含まれているもので、同時代人には一目瞭然であったいくつかの仄めかしを理解するためには、当時の警官が着用していた制服の特徴に通曉するのが有益である。どんな演劇でも図解本でも、当時の市長やその他の警察官は赤い立襟のついた緑色の制服を纏っている。コワリョーフ中佐の鼻を

⁷ ここで言う「最後の人々」とはつまり、革命によってもたらされるであろう新体制以前の旧体制にしがみつ়、瀕死寸前の世代を指している。

剃り落とした床屋のイワン・ヤーコヴレヴィチには、「銀糸で刺繍された真紅の襟と剣が見えたような気がした мерещился алый воротник, красиво вышитый серебром, шпага」——これは、彼が警官の到着を待っているという意味である。オストロフスキーの戯曲『辛い日々 Тяжелые дни』では、散々悪さをした商人ブルースコーフが妻にこう命じている——「ナスターシャ！ もしも万が一赤い襟の男だったら、今すぐそいつに、わしはモスクワを出たと言ってくれ Настасья! Коли кто с красным воротником, так сейчас ему говорите, что уехал из Москвы」[2幕7場]。

レールモントフは詩作品『この絶妙な書簡詩をお納めください…… Примите дивное посланье...』で、ペテルブルについてこう歌っている——

どこに目をやろうとも、赤い襟が
あかんべさながらに君の前に立ちはだかる……
Куда ни взглянешь, красный ворот
Как шиш, торчит перед тобой...
[1832年、1連7-8行目]

1862年、交番巡査は廃止された。後を引き継いだのは〈市巡査 городской вой〉である。それでも「交番巡査 будочник」という言葉は、慣習としてその後も長きにわたって流通した。慣習を継承する形で「市巡査」も「交番巡査」と呼ばれ続けたのである。だから、舞台が19世紀と20世紀の端境期に設定されたゴーリキーの戯曲『どん底』の中で、ブゥブノーフとクワシニャーが市巡査のメドヴェーデフを「交番巡査 бутошник」と呼んでいるとしても[1幕]、そのことを訝しがるにはあたらないのである。

1881年、警察の管轄区分の一つである「中区 квартал」は〈区域 участок〉と改名され、〈区域署主任 участковый пристав〉に統括されることになった。モスクワの有名なジャーナリスト、ギリャローフスキーは、これに関連してこう書いている——

中区署主任だったのが、区域署主任になった。

けれど全般に蒙る恩恵はまったく同じ。

中区署主任には1ルーブリ渡していたが、

区域署主任には5ルーブリ払うがいい。

Квартальный был — стал участковый,

А в общем та же благодать:

Несли квартальному целковый,

А участковому дай — пять.

【『モスクワの新聞 Москва газетная』中の「官製新聞 Казенные газеты」(この章は巻頭の「編集部より」を除いて8番目に収録されている)】

名称とともに制服もまた変った。警官は黒い外套と濃紺の羅紗の制服を身につけるようになった。

19世紀末から20世紀初頭にかけて、いくつかの大都市は県から分離し、独立した〈**特別市 градоначальство**〉となった。法的権利上、市内における特別市長は県知事と同格であって、「総督 генерал-губернатор」がいる地域では総督の、総督のいない地域では内務大臣の管轄下にあった。こうした措置が取られるずっと以前に文学作品の中で「特別市長 градоначальник」という術語に出会うとしても、読者は惑わされてはならない。『検察官』の市長は特別市長を自称しているが、これは「市の長官、市の主人 начальник, хозяин города」という意味のレトリカルな表現として理解すべきであって、当時はまだ存在しなかった役職の呼称として理解すべきではないのである。サルティコフ＝シチェドリーンの『ある都市の歴史 История одного города』に出てくる特別市長もまた、これと同じ意味で、すなわちレトリカルな表現として理解しなければならない。

6 節

郷と村

Волость и село

帝政ロシアにおけるもっとも小さな行政地域単位は〈郷 волость〉であり、郷はいくつかの村 село や小村 деревня から成っていた。郷のトップに立っていたのは、〈村の寄り合い сельский сход/сельская сходка〉によって選出される3年任期の〈郷長 волостной старшина〉であった。郷長はその助手の〈郷書記 волостной писарь/земский писарь〉とともに、村長やその他の選出された役員たちから成る「郷役場 волостное правление」を取り仕切っていた。郷長になったのは、原則として、裕福で読み書きのできる農民であった。読み書きの能力といっても、それはもちろん相対的なものであった。チャーホフの短編『谷間 В овраге』に出てくる郷長は、「ほとんど読み書きができず、どの単語の語頭も大文字で書いていた был малограмотен и каждое слово писал с большой буквы」[1章]。

1861年の農奴解放後、郷長の農民に対する権力は増強された。ネクラソフの物語詩『誰にルーシは住みよいか』では、農奴制廃止後の時代についてこう述べられている——「今度は農民を、地主に代わって／郷長が打ちのめすだろう теперь их вместо барина/Драть будет волостной」[「大宴会(第2部より)Пир — на весь мир (из второй части)」、3章「旧いことも新しいことも И старое и новое」、⁸「百姓の罪 Крестьянский грех」⁸]。

郷長の候補者は、農奴解放から1888年までは「土地係争調停官 мировой посредник」によって、1889年以降は「地方自治会長 земский начальник」によって正式に任命された。

個々の村 село において(一村の場合もあれば、いくつかの村がまとまって

⁸ もしもここからの引用だとすると、原文と若干異なっている。原文はこうなっている——〈Которых вместо барина/Драть будет волостной〉。

いる場合もあった)司法権と警察権を握っていたのは、選出された村長 *староста* が取り仕切る村の寄り合いであった。農奴制が存続していた頃、村の寄り合いは身内から、多種多様な社会的、および行政的職務を遂行するための〈十世帯頭 *десятский*〉と〈百世帯頭 *сотский*〉を選出していた。これら二つの職務の呼称はともに、それぞれの職務に就く農民一人を出さなければならない世帯数に由来している。

十世帯頭は余所者のために宿の手配もすれば、飛脚等々の仕事もこなした。レールモントフの『タマーニ』でも、十世帯頭がペチョーリンに宿泊先を見つけ出してやっている。十世帯頭が村から遠く離れて孤立した集落 *хутор* を管轄することもしばしばであった。トゥルゲーネフの短篇集『獵人日記』中の一編『死 *Смерть*』には、そんな十世帯頭の姿が描かれている。

農奴解放後、百世帯頭(ダリーはその辞典の中で、「極めて卑屈な呼称 *звание крайне униженное*」と指摘している)は、十世帯頭とともに、村の最下級警官となった。

『誰にルーシは住みよいか』に出てくるマトリョーナ・チモフエーエヴナの話には、小村 *деревня* では十世帯頭や百世帯頭が、当局の指示に従って純粹に警察的な機能を果たしていた様子が明示されている[「百姓女(第3部より) *Крестьянка (из третьей части)*」、4章「ヂョームウシカ *Дёмушка*」]。

チェーホフの短篇『夢想 *Мечты*』には、パスポートを持たない浮浪者を郡都へ護送する二人の百世帯頭の姿が、実に鮮やかに描出されている。この二人の百姓は、半死半生の病人に同情しながらも、シベリアでの自由な生活という病んだ浮浪者の夢想などとても叶わぬものと考えていることを隠そうともしない。浮浪者はあと数日の寿命だからである。

類似したシチュエーションは、ゴーリキーの『仲間 *Товарищ*』にも出てくる。そこでは村長が百世帯頭に、パスポート不所持の浮浪者を郡警察分区署長 *становой пристав* のところへ連行するよう命じている。そして連行途中で思いがけなくも、逮捕者が護送者の昔馴染みだったことが判明するのである。

百世帯頭のもっとも強烈な人物像を提供してくれるのは、チェーホフの短篇

『公務で По делам службы』である。「しゃくしえたいがしら цоцукай」⁹を自称するイリヤー・ロシャヂーンは、他所からきた役人たちに波乱万丈の人生を語り、人生に対するその不動の従順さによって彼らを唸らせている。

百世帯頭も十世帯頭も制服は着用しなかった。彼らの職責を証明したのは、胸に吊り下げた独特な銅製バッジであった。

農奴解放後の村で働く公務員については、『村長 Староста』や『応急手当 Скорая помощь』、『下士官プリシベーエフ Унтер Пришибеев』を始めとしたチェーホフの短篇の数々が、その鮮やかな人物像を読者に提供してくれる。

農奴という隷属状態から解放されはしたが、何の権利も与えられなかった一介の農民は、こうした権力側からの重圧をすべて耐え忍ばなければならなかった。サルティコフ＝シチェドリーンのルポ集『国外にて За рубежом』では、象徴的人物である「ズボンをはかない少年 мальчик без штанов」が、さながら数百万の農民を代表するかのよう、こう語っている——「なあ兄弟、俺たちは今でもついでといった感じで悪態をつかれるんだ。億劫がらない人だけだよ、悪態をつかないのは。しかもいつだって一番ひどい言葉で悪態をつくんだからね。俺たちだって流石に耳にタコができたよ。郡警察署長も悪態つくわ、分区警察署長も悪態つくわ、調停官も悪態つくわ、郷長も悪態つくわ、村長も悪態つくわで、この頃じゃあ郡の平巡查も悪態つくために雇われている始末なのさ А нас, брат, так и сейчас походя ругают. Кому не лень, только тот не ругает, и все самыми скверными словами. Даже нам надоело слушать. Исправник ругается, становой ругается, посредник ругается, старшина ругается, староста ругается, а нынче еще урядников ругаться наняли」[1章、劇中劇「ズボンをはいた少年とズボンをはかない少年(一幕物の対話)」]。

1864年以降、郷の司法機関の役割を果たしたのは、毎年村の寄り合いで選出される〈郷裁判所 волостной суд〉であった。郷裁判所は些細な民事事件、

⁹ 彼は「ソーツキー(百世帯頭) сотский」を「ツォーツカイ(しゃくしえたいがしら) цоцкай」と訛って発音しているのである。

および刑事事件を審理し、農民に対し罰金や短期留置、体罰を宣告する権利を有していた。

トルストイの『復活』では、カチューシャ・マースロワと同じ監房に収監されている逮捕者の女性の一人が、こう語っている——「私は前に、郷裁判所で百姓が鞭で叩かれるのを見たことがあるの Я одна́ видела, как в волостном мужика драли」[1編46章]。彼女の話は途中で遮られるが、それでも彼女は、「郷裁判所の納屋で百姓が鞭で叩かれたとき、彼女がどれほど驚いたかといえ、五臓六腑がでんぐり返ってしまったほどだったという話を最後まで語って聞かせた досказала свою историю, как она испугалась в волостном, когда там в сарае мужика секли, как у ней вся внутренность отскочила」[同前]。

『アンナ・カレーナ』では、根っからの農奴制擁護者である灰色の口髭をたくわえた地主が、新しい農奴解放後の、まるで農民を甘やかすような体制に対する不満をぶちまけている——「すべては郷裁判所と郷長だけでどうにかこうにか持ちこたえているのです。郷長は農民を昔どおり鞭でぶちのめしてくれますからね Только и держится все волостным судом да старшиной. Этот отпорет его по-старинному」[3編27章]。

1903年、農民の自然発生的な示威運動の増加に伴って、新たに最下級の警察階級が制定された。〈村巡查 стражник〉で、「郡巡查 урядник」の管理下にあった。この警察階級が導入されたのは、十世帯頭や百世帯頭がしばしば反逆する農民に肩入れして、当局の信用を失ってしまったからであった。しかし、村巡查も権力側の頼もしい支えとはならなかった。1905年の出来事を扱ったブーニンの短篇『夜の会話 Ночной разговор』では、登場人物の一人がこう述べている——「その村の農民たちは旦那を殺害しようと企んだのです…… 彼らの前に立ちはだかったのは村巡查たちでした。農民たちは杭や鎌を持って巡查たちに立ち向かいました。村巡查たちがそこで一斉射撃を浴びせると、当然のことながら、農民たちは逃げてしまいました…… Затеялись там мужики барина разбивать... а навстречу им — стражники. Мужики с кольями, с косами — на них. Стражники сделали залп, да, понятно, драло...」[5章]。

郷長、書記、村長、百世帯頭、十世帯頭…… こうした役職はすべて、ほとんど何の足跡も残さず、歴史に彼方へと永遠に消え去ってしまった。文学作品はこうした役職にあった人々の人物像を、その際立った特性や属性とともに、我々読者の眼前にまざまざと蘇らせてくれる——その意味で我々読者は古典作家たちに深く感謝しなくてはなるまい。

7 節

農奴解放後の諸施設

Пореформенные учреждения

農奴制が廃止された直後の 1864 年、県や市には新たな選挙による地方行政機関が設けられた。〈地方自治会 земство〉である。郡や県の地方自治会議会は、執行機関である〈地方自治庁 земская управа〉を選出した。そのトップは〈地方自治庁長官 председатель〉であった。地方自治庁のメンバーは、あらゆる身分に開かれていたものの、財産上の法廷資格 имущественный ценз によって厳格に制限されていた。したがって、地方自治庁の運営に携わったのは大きな領地の所有者、すなわちかつてと同じ地主貴族たちであった。

地方諸機関の権限は、地方の経営問題に限定されていた。地方諸機関は道路を敷設し、橋を作り、学校や病院を開設し、飢餓や人間、および家畜の伝染病と格闘し、資産の保険事業に従事した。こうしたことのすべてに資金が必要であった。地方自治会には住民に各種の税金や義務を賦課することが許可されていた。地方自治会の活動は、地方県知事の厳重な管理下におかれていた。

多種多様な制限があったにもかかわらず、地方自治会の活動は文句なしに進歩的なものだった。読者はロシア古典文学の世界において、働く住民への助力を心からの生きがいとする地方自治会の活動家や役人の姿を、一再ならず目にすることだろう。

地方自治会の仕事は反動的な貴族、昨日までの農奴制主義者たちの不満と抵抗を呼び起こした。オストロフスキーの戯曲『森 Лес』に出てくる地主ボダー

エフは、地方自治会には「俺の目の黒いうちは、びた一文たりとも支払わんぞ。資産目録を作るといふのなら作るがいいさ Я не заплачу ни одной копейки, пока жив; пускай описывают имение」、「何の得もありゃしない、あるのは略奪だけだ Никакой пользы, один грабёж」と言っている[1幕4場]。

トゥルゲーネフの長篇『処女地 Новь』に出てくるがちがちの農奴制主義者の地主、カルロメーイツェフは、彼の意見によれば、「ただひたすら行政を弱体化させ、余計な考えや実現不可能な希望を掻き立てているだけ только ослабляет администрацию и возбуждает лишние мысли и несбыточные надежды」の地方自治会を罵倒している[1編5章]。

しかし、地方自治会の活動はしばしば、進歩的な貴族たちの間にも幻滅を呼び起こすことになった。たとえば、『アンナ・カレーナ』のリョーヴィンであるが、トルストイが自分の属性を多々盛り込んだこの人物は、ほどなくして地方自治会の活動に参加するのを止めている。彼はスチーフ・オブロンスキーにこう語っている——「……僕は確信したんだ、地方自治会の活動なんてものは存在しないし、存在しえないってね…… 地方自治会は、一方から見れば、いわば玩具で、議会ごっこをしているようなものだし、他方から見れば(ここで彼は口ごもった)、郡の役人連中^{ゴトリ}が金を溜めるための手段なんだ…… 不当な俸給という形でね ...я убедился, что никакой земской деятельности нет и быть не может... С одной стороны, игрушка, играют в парламент... а с другой (он закинулся) стороны, это — средство для уездной coterie наживать деньжонки... в виде незаслуженного жалованья」[1編5章]。

実際、零落した貴族の多くが地方自治会の活動に求めたのは、民衆の困窮の軽減ということではなく、自分の地位と新たな収入源の強化ということであった。こうしたことを当てにしているのは、たとえば、女地主グウルムィーシスカヤと結婚した、まともな教育を受けていない貴族のブラーノフである(オストロフスキーの戯曲『森』)。老地主のミローノフは彼を鼓舞しようと言っている——「新しい施設や機関には新しい人材が必要だが、その人材がない。彼らこそがその人材なのです！ Для новых учреждений нужны новые

люди, а их нет. Вот они!」[5幕8場]。確かに、若いブーラーノフには年齢的にまだその資格がない。しかし、ミローノフはそこですかさずこう言って慰める——「まあどうしようもないですから、2年ほど待つとしようじゃありませんか。そして地方自治庁の役職か、あるいは他の名誉ある職務を見つけようじゃありませんか Ну, что ж, мы подождем годика два; а там и в управу или другую почетную должность найдем」[同上]。当のブーラーノフは近隣の地主たちにこう請合っている——「……皆さんはきっと、小生が私たちの利益や特権のもっとも熱烈な擁護者であることをお知りになることでしょう ...вы найдете во мне самого горячего защитника наших интересов и привилегий」[同上]。

オストロフスキーの喜劇『陽は照れども暖はなし Светит, да не греет』では、ザレーシン¹⁰がこう言っている——「ほんの少し運営の仕事をするだけさ。つまりときどき地方自治会に出かけていって、当地の素人雄弁家に混じってあくびをしたり、居眠りしたりするだけのことさ Хозяйничаем немножко: иногда проедешь на земство, позеваешь, продремлешь там среди наших доморощенных ораторов」[1幕6場]。

チャーホフの短篇『中二階のある家 Дом с мезонином』に出てくるリーダは、こう嘆いている——「私たちの郡全体がバラギンに牛耳られているのです。彼自身が地方自治庁の長官を務め、郡の役職という役職をみんな自分の甥や娘婿たちにばらまいて、好き放題のことをしているのです。闘わなくてはいけません Весь наш уезд находится в руках Балагина. Сам он председатель управы, и все должности в уезде роздал своим племянникам и зятьям и делает, что хочет. Надо бороться」[1章]。

地方自治会の運営にはまったく不適格な人材が割り込んでくることもしばしばであった。チャーホフの戯曲『イワーノフ Иванов』に出てくる地方自治庁長官のレーベデフは、意志薄弱にして不身持な「団子鼻の酔いどれ толсто-

¹⁰ サパーシン Запашин となっているが、ザレーシン Залешин の間違いと思われる。

НОСНЫЙ ПЬЯНИЦА」[3幕5場のレーベデフ自身の台詞]である。

チェーホフの戯曲『三人姉妹 Три сестры』に出てくる、しょぼくっていて意気地のない零落貴族のアンドレイ・プローゾロフは、郡地方自治庁の書記 секретарь という慎ましい役職に就いている。彼もかつては著名な学者になることを夢見ていたのだが、妻の愛人で、みんなに軽蔑されている地方自治庁長官プロトポーポフの部下に甘んじているのである。

画家ミャソエードフの有名な絵『地方自治会の昼食 Земство обедает』(1872年)には、はるばる遠方から地方自治会へやってきて、地方自治会の昼食が終わるのを忍耐強く待っている農民代表たちの姿が、共感を込めて描かれている¹¹。

サルティコフ＝シチェドリーンはその童話『地方の活動家 Земский деятель』に、県知事が県内のあらゆる地方諸機関諸施設に圧迫を加える様子をアイロニカルに書き留めている¹²。

その一方で、地方の諸機関諸施設では心底献身的な活動家も少なからず働いていた。それはとりわけ医師や教員で、彼らは一般民衆に多大な貢献をした。

地方の医師の多種多様なタイプは、チェーホフの短篇『不快な出来事 Неприятность』や『暗黒 Темнота』、『脱走者 беглец』、戯曲『イワーノフ Иванов』や『ワーニャおじさん Дядя Ваня』に描かれている。短篇『イオーヌイチ Ионыч』の主人公である地方医師のスタールツェフは、市民としての理想を喪失し、地方生活の泥沼に呑み込まれてしまっている。

都市の改革も地方の改革と五十歩百歩であった。すなわち、1870年には土地や商売、手工業に関わる市税を納めているすべての市民に、〈市議会 городская дума〉の〈議員 гласный(=депутат)〉を選出する権利が与えられている。市議会の執行機関は〈市役所 городская управа〉で、そのトップは〈市長 городской голова〉であった。それに伴い、エカテリーナII世時代から活

¹¹ 参考のために、5章翻訳の掉尾にこの絵を掲載してある。

¹² これは連作『生活の些事 Мелочи жизни』の第5篇「播種領域内で В сфере сеяния」の3章に当たる作品である。

動していた、「市長 городской голова」をトップに戴いた何の権利も持たない〈6人市議会 шестигласная дума〉は、商人や町人のための身分別司法機関 сословная судебная инстанцияである〈司法庁 магистрат〉とともに廃止されている。

市議会は市役所とともに、市のあらゆる運営を取り仕切った。市議会と市役所の活動は、県知事の厳格な管理下にあった。市議会によって選出された市長もまた県知事によって承認されるのがつねであったが、モスクワとペテルブルクでは皇帝によって承認された。それにもかかわらず、市議会の権威は大変大きなものだった。市議会で主導的役割を果たしていたのは、大貴族や大商人たちであった。市議会議長として選出されるのは、原則として、裕福な貴族か、あるいは大工場主であった。

市議会の会議の様子は、チャーホフの短篇『住民諸君 Господа обыватели』の中に非常にコミカルに描かれている。

市長という権威ある職務は、大多数の商人や富裕な小市民にとってはかなり魅力的な職務であり、市長選ともなると彼らの間で熾烈な闘いが繰り広げられたのであった。

ゴーリキーの戯曲『小市民 Мещане』に出てくるベスセミョーノフは、「市長」を「長」と略しながら、こう言っている——「小生はとても長にはなれませんまい！ 金物工場長のフェーヂカ・ドセーキンが長の座を狙っているんです…… あの青二才が！ あのひよっこが！ ...Не быть мне головой! Федька Досекин, слесарного цеха старшина, в головы метит... Мальчишка! Щенок!」[3幕]。

ゴーリキーの戯曲『野蛮人たち Варвары』の登場人物の一人は、虚栄心が強く高圧的な市長のレドズーボフである。巷では彼のことをこう言っている——「あいつは市の頭[市長]じゃなくて、大口だ…… 愚鈍で貪欲な大口だ…… Это не голова, а — пасть... глупая и жадная пасть...」[1幕/技師チェールクウンが妻に言う台詞]。

ゴーリキーの戯曲『ワッサ・ジェレズノーワ Васса Железнова』に出てく

る商人プロール・フラーポフは、妹の夫が弾劾された今となつては彼が市長になる目がもはやないことを嘆いている。家族の評判に傷がついてしまったからである[1幕]。

チェーホフの短篇『酷寒 Мороз』には市長となつた商人エレメーエフが出てくる。彼は魚屋の売り子から叩き上げて、百万長者になった男である。またチェーホフの別な短篇『ライオンと太陽 Лев и солнце』では、虚栄心に取りつかれた市長の商人クーツィンの姿が描かれている。彼は、はるばるやってきたペルシャの高官から外国の勲章をゆすり取ろうとしている。

1917年に市長職は他のあらゆる制度とともに廃止されるが、そのことを想起させてくれるのは、ゴーリキーの戯曲『ドスチガーエフとその他の人々 Достигаев и другие』におけるグービンのネストラシヌイーに対する次のような反駁である——「何だって、兄弟？ お前は俺を市長の座から叩き出したが、今度はお前が叩き出されたってわけかい？ いったいどこのどいつがお前を叩き出したんだい、え？ Что, брат? Вышиб меня из градских головы, а теперь и тебя вышибли? Да и кто вышиб, а?»[1幕]。

8 節

農奴解放後の裁判

Пореформенный суд

1864年に裁判制度の改革が実施された。それ以前の裁判は身分別の裁判で、それぞれの身分別に、あるいはいくつかの身分別に分かれて裁判が行なわれていた。予審もなければ、原告被告双方の口頭弁論もなく、弁護側弁論もなかった。裁判の行方はひとえに行政当局によって左右された。

新しい裁判は自主独立的なものと宣言された。新しい裁判には国家公務員である弁護士が参加した。この弁護士は〈官選弁護士 присяжный поверенный〉と呼ばれた。さらに〈私選弁護士 частный поверенный〉もいた。私選弁護士は、すべての裁判ではなく、私選弁護人の活動が許可された裁判にだけ

列席できる権利を与えられていた。審理は公開で、傍聴人を前にして行なわれることになった。最重要事件の判決には12人の〈陪審員 присяжный заседатель〉が参加した。陪審員は籤引きによって、主として当地住民の高い身分の人々から選出された。彼らは被告が有罪か無罪かの自説を陳述し、裁判官が量刑を決定した。

こうした裁判の審理の場面は、ドストエフスキーの『カラマーゾフの兄弟』やトルストイの『復活』、『生ける屍 Живой труп』の中に描き出されている。

些細な事件は、「郡地方自治会議会 уездное земское собрание」や「市議会 городская дума」によって3年任期で選出される〈調停裁判官 мировой судья〉が単独で審理していた。住民がもっとも頻繁に顔を合わせなければならなかった調停裁判官の人となりは、ロシア文学を繙けば不斷に目にすることができる。調停裁判官は俗語では「調停屋 мировой」とか、もっと侮蔑的に〈示談屋 мирошка〉などと呼ばれていた。しかし、1889年から1912年にかけて、小村では権勢並ぶ者のない〈地方自治会長 земский начальник〉が調停裁判官の代理を務めた。

調停裁判官の判決は調停裁判官の会合である〈調停裁判会 мировой съезд〉に控訴することができた。この会合の舞台裏は、チェーホフの短篇『セイレン[誘惑] Сирена』の中にユーモラスに描かれている。

チェーホフの『下士官プリシベエフ унтер пришибеев』の主人公は裁判にかけられ、調停裁判官に一月の拘留を言い渡されている。この短篇が書かれたのは1885年のことで、1889年以降ならばこうした判決は不可能であっただろう。1889年以降ならば地方自治会長が審理にあたったはずだからである。

サルティコフ＝シチェドリーンの長篇『ゴロヴリョーフ家の人々 Господа Головлевы』では、何かと言いがかりをつけたがり、些事にやたらとこだわるイウドゥーシカ・ゴロヴリョーフが農民たちを調停裁判官に告訴している。

オストロフスキーの『持参金のない娘 Бесприданница』では、ラリーサ・オグッダーロワの不運な婚約者である小役人カランドィシェフが調停裁判官に立候補しようとしている。彼の期待は、零落した郡でこの役職にありつくこ

とである。ラリーサは、零落した郡ならば候補者もずっと少なく、きっと選出されるでしょうよ、と説明している[2幕3場]。

〈名誉調停裁判官 почетный мировой судья〉という役職もあった。実際よりもずっと権威ある役職であった。これは正式な常勤職ではなかった。名誉調停裁判官は、調停裁判官不在時にその代理として、ということは短期間の勤めを果たすだけだった。『アンナ・カレーナ』のヴロンスキーがこの名誉に預っており、彼はこのことをこう自慢している——「私が思うに、調停裁判会に出かけて行って、農民の馬に関わる事件を審議するという義務は私にとって、私がなしうることのすべてと同じくらい重要なのです Я считаю, что для меня обязанность отправляться на съезд, обсуждать дело мужика о лошади так же важна, как и все, что я могу сделать」[6編22章]。

オストロフスキーの喜劇『狼と羊 Волки и овцы』に出てくる裕福な地主ルィニャーエフもまた、名誉調停裁判官の職に就いている。

調停裁判官の職務は1889年、小村のみならず、大都市でも廃止された。大都市では調停裁判所の職務を政府任命機関の〈市裁判所 городской суд〉が引き継いだ。1912年になってやっと、革命運動の影響を受ける形で調停裁判所が復活したが、すべての地域においてではなかった。

9 節

憲兵

Жандармерия

デカブリストの乱が終わってまもない1827年、ニコライ I 世によって〈憲兵隊 жандармский корпус〉が創設された。憲兵隊長官に任命されたのは、寵臣ベンケンドールフであった。〈憲兵 жандармерия〉(仏語の gendarme = жандарм、すなわち「武装した人」に由来)は、独裁政権が革命運動や解放運動に対抗するための鎮圧部隊の役割を担っていた。警察が内務省の直属機関だったとすれば、憲兵を掌握していたのは皇帝自身であった。皇帝による憲兵

統括は1880年に至るまで、かの悪名高き「皇帝陛下直属官房第三課 Третье отделение собственной Его императорского Величества канцелярии」を通して行なわれた。

〈憲兵 жандарм〉の姿が見えただけで、人々はどうしようもないくらいの恐怖に襲われた。憲兵は水色の制服 голубая форма を着用していた。このため皮肉屋たちは、水色を憲兵色と呼ぶようになった。レールモントフは、カフカース出発に際して作った作品にこう書いている――

さらばだ、汚らしいロシアよ、
奴隷の国よ、旦那衆の国よ、
そして、水色に装った憲兵よ、
そして、憲兵の言いなりの国民よ。

Прощай, немытая Россия,
Страна рабов, страна господ,
И вы, мундиры голубые,
И ты, им преданный народ.

【『さらばだ、汚らしいロシアよ……』1841年、全8行中の冒頭4行】

ゲルツェンは『過去と思索』の中で、自分の逮捕のことを書きながら、こう回想している――「書記も、副官も、将校も、みんな水色であった Писаря, адъютанты, офицеры — все было голубое」[2部「牢獄と流刑」、11章「クルチーツキー兵舎」、1節]。さらにその先では「水色の陸軍大佐 голубой полковник」が登場している[2部、12章「結審」、2節]。革命以前の読者にとってこうした特徴は、話題に上っているのが憲兵であるということをはっきりと教えてくれる目印だったのである。

『検察官』のフィナーレに登場し、役人たちをその場に釘づけにするのは、つまり「だんまりの場 немая сцена」を招来するのはいったい誰か？ それは憲兵である。彼の台詞に注目しよう――「特命を帯びてペテルブルクから来訪

されしお役人が、諸君の彼のもとへの速やかな出頭を要請しておられます
Приехавший по именному повелению из Петербурга чтовник требует вас
сей же час к себе」。〈特命 **именное повеление**〉とは、皇帝自身によって個人的に託される命令のことである。憲兵将校が本物の検察官を帯同してきたのである。役人たちが釘づけされざるを得ないのは、まさしくそれゆえに他ならない。

各県都には憲兵課が設置されていた。そのトップは、通常は陸軍大佐の位にある憲兵将校であった。チチコフが逗留する県都では、「新参者の到来に満足していた были довольны приездом нового лица」、つまりはチチコフの到来に満足していた顔ぶれの中に、当地の憲兵大佐が混じっている。教養程度の低いことが見え見えの憲兵大佐は、チチコフのことを学者だと評している[1部1章]。

チチコフを総督のもとへ召喚するのは、当地の憲兵ではなく、明らかにずっと高位の当局から派遣されてきた憲兵に他ならない。ゴーゴリはこの憲兵を次のように描写している——「チチコフの前にぬっと現れたのは、口髭をたくわえ、頭に馬の尻尾を生やした怪物で、一方の肩に肩帯がついているばかりか、もう一方の肩にも肩帯がついていて、身体の片側には長大な剣がぶらさがっていた。チチコフには、身体の反対側には小銃がぶらさがっているに違いなく、こいつはたった一人で全軍を背負っているかのようなとんでもない奴だ、と思われた Перед ним торчало страшилище с усами, лошадиный хвост на голове, через плечо перевязь, через другое перевязь, огромнейший палаш привешен к боку. Ему показалось, что при другом боку висело и ружье, и черт знает что: целое войско в одном только!」[2部「終章のうちの1章 одна из последних глав」]。

憲兵たちはとりわけ重要な国家施設を警護し、鉄道の保安を受け持っていた。広く人口に膾炙しているチェーホフのユーモア短篇『苦情帳 Жалобная книга』では、苦情帳は「そのために鉄道駅舎内に特別に設けられた事務室 в специально построенной для нее конторке на станции железной дороги」にお

かれてあって、事務室の鍵は「鉄道憲兵の手で保管されている хранится у станционного жандарма」ことになっている。

ブーニンの短篇『紛糾 Путаница』¹³では、鉄道駅のプラットフォームに、「唇の両脇に立派な髭をたくわえ、制帽のつばと同じ水色の穏やかな目をした憲兵大佐 жандармский полковник с великолепными подусниками и с безмятежными голубыми глазами в тон околышу фуражки」が姿を見せけている。

20世紀初頭には政治警察としての憲兵の役割が強化された。憲兵が捜査や逮捕に乗り出すようになったのである。その様子についてはゴーリキーの作品『母』や『クリム・サムギンの生涯』から知ることができる。

ゴーリキーの戯曲『敵 Враги』では、さる工場で工場長が殺され、ストライキが発生する。そこへストライキ鎮圧のために憲兵大尉 жандармский ротмистр ボボーエドフが部隊を引き連れてやってくるのだが、彼は地方警察 местная полиция や郡警察分区署長 становой に対する不満をぶちまけている〔3幕〕。

10 節

いくつかの忘れ去られてしまった職務

Несколько забытые должности

この章を閉じるにあたって、ずっと昔に廃止されてしまったが、ロシア古典文学の世界で見かけるいくつかの職務について、辞書に載っている順番に説明することにしよう。

まずは〈**税務署員 акцизный чиновник**〉。煙草やワイン、砂糖といった大量消費される品々に課された間接税は、〈**消費税 акциз**〉と呼ばれていた。税務署員はそうした消費税の国庫納入を管理していた。この職務は不面目な職務とみなされ、文学の世界で言及されるときはアイロニーを伴うのがつねで、消費

¹³ 手元にあるブーニンの作品集にはこの短編の存在を確認できず。

税関係の仕事に就くのは、身分の低い、取るに足らない人々であった。たとえば、チェーホフの戯曲『イワーノフ』に出てくる、口喧しい小者のコスィーフ、それにゴーリキーの『野蛮人たち』に出てくる哀れなモナーホフがそうである。またチェーホフの有名な短篇『馬のような苗字 Лошадиная фамилия』でブウルデーエフ將軍の執事が忘れてしまうのも、歯痛を呪文で治すことのできる税務署員のオフソーフという苗字に他ならない¹⁴。

〈書類記録係 журналист〉。ジャーナリストを表すこの言葉はかつて、現在では失われてしまったもう一つの意味を持っていた。受信した書類と発信した書類の記録を司る下級事務官という意味である。オストロフスキーの戯曲『深淵』に出てくるポグウリャーエフが就こうとしている仕事こそ、こうした「書類記録係の仕事 журнальная работа」に他ならない[1幕3場]。またブウニンの短篇『百万長者 Миллионер』¹⁵には、「客たちが独身で郵便局の書類記録係をしているラキーチンのところに集まった собрались гости у холостого журналиста почтовой конторы Ракитина」と書かれている。

〈常任メンバーнепременный член〉、あるいは〈常任委員 непременный заседатель〉等々。これは定期的な選挙によって改選されることのない、上層部から任命された恒常的なメンバー、委員を意味した。

〈文書係 письмоводитель〉。これは通信業務と文書事務処理を担当する役人のことである。民間の文書係もいて、彼らは「私設秘書 домашний секретарь」と呼ばれた。ゴーリキーの戯曲『エゴール・ヴウルィチョーフとその他の人々 Егор Булычев и другие』と『別荘の人々 Дачники』に出てくる、前者のチョーチン、それに後者のグレープが、この私設秘書である。

〈租税収税吏 податной инспектор〉。租税収税監督局 податная инспекция が司っていたのは、〈租税 подать〉の集金、すなわち「納税義務を負った階層 поданные сословии」の農民、および町人の資産から徴収される税金の集金で

¹⁴ 「オフソーフ Овсов」は、馬の飼料となる「オヴヨース овёс(燕麥)」から派生した苗字。

¹⁵ 手元にあるブウニンの作品集にはこの短編の存在を確認できず。

ある。

〈後見人 попечитель〉。こう呼ばれていたのは、いくつかの官庁の長官である。『検察官』に出てくるゼムリャニーカは、慈善施設の後見人、すなわち責任者である。学区の管理に当たる後見人もいた。

〈郵便局長 почтмейстер〉。郵便局の責任者のことである。この言葉を聞くと我々読者の脳裡には、『検察官』の事件展開に重要な役割を演じる、探究心旺盛な郵便局長シペーキンの姿が思い浮かぶ。

〈司法代理人 стряпчий〉。これは司法関係の職務である。こう呼ばれていたのは、ある種の司法関係の役人たちで、たとえば県検事の助手などである。郡には「県司法代理人 губернский стряпчий」に仕える「郡司法代理人 уездный стряпчий」がいた。さらに、民事訴訟を手掛ける「口利き ходатай」もいた（オストロフスキーの喜劇『身内同士はあと勘定 Свои люди — сочтемся』に出てくるリスポロジェンスキー）。この職務は1863年に廃止された。

〈次官 товарищ министра〉、〈検事補 товарищ прокурора〉、〈副議長 товарищ председателя〉等々。これらはすべて助手、補佐役のことである。

〈特別任務官 чиновник особых поручений〉。通常これは県知事付きの、あるいはそれ以外の高位の役職者付きの若くて前途有望な役人で、様々な重要案件の研究と調査のために特別に全権を与えられ、公務出張へ派遣された役人を指した。この職務は前途洋々とした、出世を望める職務とみなされていた。トゥルゲーネフの長篇『貴族の巣』のパーンシン、ゴンチャロフの長篇『懸崖』のヴィケーンチエフ、同じ作者の長篇『平凡物語 Обыкновенная история』のピョートル・アドゥーエフがこの職務に就いている。ゴーゴリはこの職務について『ネフスキー大通り Невский проспект』の中で、こう書いている——「人も羨む運命によって特別任務官という祝福すべき職位を恵与された人も[彼らに加わる] [к ним присоединяются] те, которых завидная судьба наделила благословенным званием чиновников по особенным поручениям」。

〈エグゼク्यूートル(体罰執行官、庶務監督官)эксекутор〉。知られているのは「エグゼク्यूーツィヤ экзекуция」という言葉、すなわち体罰という意味の

言葉である。実際のところ、かつて「エグゼクゥートル(体罰執行官)」は、たとえばドストエフスキーの『死の家の記録 Записки из Мертвого дома』に出てくるジェレビャートニコフのように、体罰の執行というおぞましい業務に従事していたこともあった[2部2章「病院(続き)」]。しかし、ロシア文学の世界で出会うそれ以外の「エグゼクゥートル」は、あくまでも平和的な人物たちである。ゴーゴリの戯曲『結婚 Женитьба』に出てくるヤイーチニツァしかり、チェーホフの短篇『ある役人の死 Смерть чиновника』に出てくるチェルヴァコフしかりである。経営を管理し、諸機関の秩序維持に携わっていた役人もまた「エグゼクゥートル(庶務監督官)」と呼ばれていたのであった。

* * * * *

〈注 11 のための参考資料〉(255 頁参照)

グリゴリー・グリゴリエヴィチ・ミャソエードフ(1881~1953 年)

『地方自治会の昼食』(1872 年)

